読売歌壇

小池　光　選

所在なくテレビを点ければ深海にシーラカンスの鰭ふるを観る　小美玉市　松山　光

【評】作者は九十六歳の方。深い南の海を悠然と泳ぐシーラカンスに、おのずから親しみが湧く。まるで昔からの友人のように。「鰭ふる」というところがいい。

雨の中をまっすぐ飛んで行く鳥を悲しきもののように見ている　町田市　岩本　房子

【評】降る雨の中をまっすぐに飛ぶ鳥。悲しいものを見るようにそれを見る。なにも不明なものはないが、ふと立ち止まる謎がある。人間もまた同じなのではあるまいか。

自転車に坂三つ越えてかよひたる父の介護の八年思ふ　青森市　安田　渓子

【評】長いようで短かかった八年。自転車で、しかも坂を三つも越えて、というところにインパクトがある。父よ、安かれ。

流れくる「白い花の咲く頃」を深夜に一人しみじみと聞く　大阪市　大和田芳美

握手せし友の力の弱まりを指が忘れぬ風の泣く夜　八尾市　上柿　貞芳

びゅんびゅんと大縄回しいつまでも入れぬ少女泣き始めたり　調布市　川久保洋子

六甲の山なみ霞む待ちわびし春は来にけり後無き老いに　神戸市　大浜　義弘

闇米を背負ひし母は咎められ大泣きしたる吾と弟　富山市　関　昌子

わが見るはまさしく里見浩太朗脇に回れど主役よりよし　稲城市　山口　佳紀

ひとすじの煙となりて愛犬は今虹の橋渡り行くかな　枚方市　西　玲子

栗木　京子　選

人影がどこからですかと問い掛けるベールのような湯気の向こうから　岩国市　須山佳代子

【評】四句目までの状況にはミステリアスな雰囲気が漂うが、結句まで読むと旅先で温泉に入っていることがわかる。見知らぬ人との触れ合いは日常を豊かにしてくれる。

右に寄れ左に寄れと書いてない歩くなとあるエスカレーター　横浜市　杉山　太郎

【評】エスカレーターでの歩行禁止の呼び掛け。左右の一方が空いていると歩いてしまうので、どちらにも片寄らずに立つことが大事なのだ。場面を歯切れよく詠んだ一首。

園庭の辛夷の花の二、三輪並び見あげる揃いの帽子　羽曳野市　赤沢　皆

【評】「揃いの帽子」とあるので園児たちであろう。高い所に咲く辛夷の花を顔を上げて眺めている。愛らしい光景が目に浮かぶ。

雑談が上手くできずに丁寧な相槌ばかり雨の更衣室　大和郡山市　大津　穂波

デイケアと医院と空き家が目立つ街卒寿の母はその片隅に　東京都　岩本　朗

かずかずの亡母の写真を見返して立ち位置の多くが真ん中と気づく　高崎市　松田　正義

日に一首作ると決めたあの日から三十一文字は素数と知りぬ　駒ヶ根市　春日　賢治

パチパチと追い焚きはぜる春の宵かまど口より母の歌声　和歌山県　中山　茂樹

大学の初日を終えた長男がまず学食を笑顔で話す　東京都　佐藤　一郎

鉛筆を削ると五感が澄んできてスマホと違う歌が生まれる　横浜市　山本喜太郎

俳　万智　選

春が来る　オーケストラでシンバルが出番を待っている確かさで　越谷市　あきやま

【評】春の到来、その直前の静かな緊張感が伝わってくる。タイミングを狙いすますシンバル。ジャーン！という音を、一首の中で鳴らしてしまわないところが心憎い。

コートならクリーニングに出してきて寒くなってもここからが春　市原市　十条　坂

【評】三寒四温の日々、冬物をクリーニングに出すタイミングは悩ましい。ともかく線引きをして「自分にとっての春」を決める潔さが、心地よい。

吉原のことばが耳に残りんす春の花屋に咲くヒヤシンス　東京都　富見井高志

【評】ＮＨＫの大河ドラマ「べらぼう」の影響だろう。花屋のヒヤシンスを見てさえ言葉が蘇るのだ。音の気づきが楽しい一首。

この棚の端からぜんぶください という勢いで抱きしめられる　高島市　くらたか湖春

湯に浮かぶポーチドエッグふわふわとまもなく切れる派遣契約　宇都宮市　津布久　勇

泣きそうな後悔があるティーポット割らないようにやさしく洗う　埼玉県　玖嶋さくら

インストゥルメンタルだとは知らないで歌を待ってた、初恋だった　燕　市　田巻由美子

スペインの飛び地がここに　太陽のように明るく丸くパエリヤ　東京都　武藤　義哉

私は輪切りのレモン君といふ紅茶に淡き香を移すのみ　青梅市　諸井　末男

編み針をオールのやうに動かしてわたくしだけのみづうみをゆく　千葉市　小金森まき

黒瀬　珂瀾　選

春寒に「まんで冬や」と言う義姉の受話器の先に能登が現る　新潟市　横間　征子

【評】以前の作に続き、能登の親族への労わりを詠む作者です。能登弁の「まんで」は「ものすごく」の意。方言の一言が故郷の風土を脳裏に呼び起こす。春を待つ心があります。

たらの芽の天ぷらのほのかな苦み　人生もまたほどほど苦い　千葉市　佐藤　綾子

【評】ただ甘ったるいだけではつまらない。ほどほどの苦みこそが、季節の味覚の喜びであり、私たちの人生の意義なのでしょう。

遠き日に遼くへゆきし父母のこの頃近し吾は老いにけり　松江市　三方　元

【評】「遠い」と「遼い」で詠み分けたのがこの歌のポイントです。早く亡くなった両親が懐かしく思えてくるのは自分が歳を取ったから。老いの感覚は時間を超えるのです。

変人と揶揄されてなほわれは詠む原発事故は人災だつたと　福島県　黒沢　正行

開幕は日本人同士の一騎打ち大谷さえも小さく息吐く　小田原市　後藤　忠国

誰も見ぬテレビ画面は真白くて整形外科室リハビリの午後　水戸市　大野太加し

教室の壁に貼られし孫の絵の時計はママの帰宅の時間　鴨川市　春木　敦子

ほつほつと梅のふくらむ境内にいかつき不動も早春の顔　瑞穂市　渡部　芳郎

彼岸前の雪降りしきり眼裏に母の厨は小豆香りぬ　桶川市　今西　佳子

鴨川の春降る雪に背を丸めトンビのごとく帰りを急ぐ　西宮市　森　英明

次回は22日（火）掲載予定

◇投稿規定◇　はがき１枚に未発表の１作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。
◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　右の影絵はたけのこ